

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスペース

(宮古・大槌・釜石・障がい者センターかまいし・大船渡・米川・石巻・福島デスク・原町・もみの木・CTVC)

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

3か月ごとに開催されている全ベース会議も、22回を迎えました。これまでは、カリタス関係のすべてのベースからベース長を中心とした人々が集まり、報告や討議などを重ねてきました。しかし、今回は、ほぼすべてのベースから合わせて32人のスタッフが参加し、親睦も兼ねた全ベース会議が企画され蔵王のホテルで開かれました。1泊2日の会議でしたが、これだけの時間では足りない、という皆さんの感想でした。会議の要約をお届けいたします。まず、カリタスジャパン責任司教の菊地功司教様から、「カリタスの業～カリタスジャパンの基本姿勢～」というテーマで大変貴重なお話をしていただき、その後、第二部の報告と分かち合いに移りました。

その他、米川ベースが実施した大和町でのボランティア活動のご紹介と、来年度の「復興支援カレンダー」のご案内を掲載しております。

第22回 全ベース会議

仙台教区サポートセンター

第一部 菊地司教様のお話

「カリタスの業～カリタスジャパンの基本姿勢～」

2011年3月16日の仙台教区サポートセンター立ち上げ以来、「カリタス〇〇」としてたくさんのベースが活動している。カリタスが何を目標として活動しているのか、その理念をお話したい。

カリタスの業について考えるとき、中心になるのはベネディクト16世の回勅『神は愛 (DEUS CARITAS EST)』という文書である。これは、現在のカリタスの活動の基本として重要視されている。

その中に、教会には3つの本質的な務めがあると書かれている。

「①神の言葉を告げること、証をすること (宣教)」

「②秘跡を祝うこと (ミサ)」

「③愛の奉仕を行うこと」

これら3つは、それぞれがお互いを前提として存在しており、教会には常にこの3つが存在していなければ成り立たないのである。

「愛の奉仕」というのは個々人の心の優しさにも基づいていて、一人一人が奉仕に努めるのはもちろんのこと、それ以上に教会は共同体全体として愛の奉仕を実践しなければならない。そこには秩序ある奉仕を行うために、組織体が必要とされる。それを通じて、教会が共同体として愛の奉仕活動を行うことが出来る。これが、カリタスという組織が存在する最も大きな理由である。独立したNGOとしてカリタスが存在しているのではなく、「カリタス〇〇」として活動するときは、教会全体としての愛の奉仕の一部である。教会共同体との関係性は切っても切り離せないということを認識していただきたい。

教区外の人たちが、教区内で行われていることに対してどのように関わっていくかという時に重要なのが「パートナーシップ」という言葉である。

教会におけるパートナーシップとは、「連帯と補完性の原則に則り、お互いの尊敬、信頼、善意に基づいた関係」と定義されている。



「補完性」という言葉は、もともとレオ13世が社会教説の中で初めて使い、その後、ピオ11世も定義づけた言葉である。1991年、教皇ヨハネ・パウロ2世は回勅『新しい課題』の中で、「上位の共同体は下位の共同体からその役割を奪い、その内的生活に干渉すべきでなく、むしろ絶えず共通善の観点から必要な時にはこれを支え、これらの相互の活動のために援助すべきです。」と述べている。

今回の東日本大震災の復興支援のことを考えると、仙台教区と日本の教会 (All Japan)、カリタスジャパンの関係性は、上位の大きな団体は (管轄範囲、資金面で) カリタスジャパン、日本の教会であるが、下位である仙台教区が自分で果たしうることを、勝手に外からやってきてしてしまっはいけないということである。主体性はその地の教会共同体にあるのであり、それを越えて外から来たものが勝手に判断をして進めるとするのは補完性の原理に反する。これが教会のパートナーシップの考えである。

援助する側とされる側ではなく、お互いにパートナーとして関係を構築していこうという姿勢が大切である。力関係としては援助する側が強く、される側が弱いというのは常に起こりうることであるが、カリタスが様々な現地で関わっている援助関係のプロジェクトにおいても、そこに生活する人々と支援をする人との関係の中でどのようにパートナーシップを構築するかということは常に心に留めておきたいことである。

カリタスの業の目指すところとして、2014年の世界の人口とGDPの関係を数字で見ると、人口71億人のうち18%が高所得国、12%が低所得国、70%が中所得国である。GDPは、どれだけお金を使っているか (お金を使う能力) という数字であり、高所得国が68%を占めている。かつては世界の割合の8割を世界人口の2割の高所得国が占めていたが、今は、そのバランスが崩れ始めており、世界の18%の人が世界の富の68%を占めているというのが世界の現実である。

いわゆる先進国が途上国に行っている開発援助に関しては、例えばアフリカと先進諸国との間のお金の流れを計算すると、先進国から毎年アフリカに流れているお金よりも、アフリカから借金の利払いで流れている額の方が大きい。そして今までは先進国と開発途上国との間であったが、今現在、先進国の中でも同じ状況が起きている。

教皇フランシスコの使徒的勅告『福音の喜び』に、「殺してはならない～経済体制への警告～」という一文がある。「殺してはならない」という掟が人間の命の価値を保障するための明確な制限を設けるように、今日においては「排他性と格差のある経済を拒否せよ」、とも言わなければなりません。この経済は人を殺します。

これは教皇フランシスコの基本的姿勢の重要な柱の一つである。「殺してはならない」とはご存知の通り、神の十戒に「殺すなかれ」と記されていること。つまり、十戒と同じ意味、重さを持って「排他性と格差のある経済よ、なかれ」、と我々は言わなくてはならない、と言っている。これは日本や世界で大きな問題となりつつある。

排他性は例えば、「路上生活の老人が凍死してもニュースにはならず、株式市場で2ポイント下落することが大きく報道されることなどあってはならない。」これが排他性であり、格差については「飢えた人々がいるにも関わらず、食料が捨てられている状況を私たちは許すことができません。これが格差です。」と教皇は言っておられるのである。

排他性について教皇フランシスコはもっと激しいことを考えており、「排他ではなく、廃棄である。」と言っている。「私たちは廃棄の文化をスタートさせて、排他性というのはもはや社会の底辺へ権利の行使できないところへ人を追いやることである。」排除することはかつて搾取と言われていたが、今では搾取もせず、余分なもの、いらぬものとして廃棄して存在すら認められない。これは私たちの暮らしている社会でも現実的に起こりつつあると感じることである、と指摘している。

私たちの関わりの姿勢の中で考えなくてはならないこととして、直接的な手助けをするということと、もう一つ違う方法がある。直接的な手助けはとても必要なことであるが、対象は限定され、影響も短期的でしかない。これを心に留めておく必要がある。

私たちがしたいのは、希望を失って不安にある人たちが自ら立ち上がり、道を切り開き、希望と勇気を生んでいくように心を変えていくことである。

イエスは人の心を変えていく方である。人々から存在を否定され、無視されていたバルティマイの存在を人々が認めて、「さあ行きなさい。立ちなさい。お呼びだ。」と希望へと励まし、行動を起こすようになったのはイエスの「あの人を呼んできなさい。」という言葉である。一つという言葉が人々の心を変えた（マルコ10-46-52参照）。

こうしたことができれば、広範囲で長期的な影響をおよぼす援助ができるのではないかと、私は考えている。

ベネディクト16世は『神は愛 (DEUS CARITAS EST)』の中でカリタスの組織の内容について書いている。

「スタッフは専門的な能力を持ってはなりません。何をどのようにしなければならぬかの適当な教育を受けてからでなければ、奉仕活動に従事してはなりません。」と言っているが、同時に「専門性は第一の基本的な条件ですが、それだけでは不十分です。専門的な教育に加えて、教会の愛の業を行うスタッフは心の教育を必要とします。すなわち、彼らはキリストのうちに神との出会いへと導かれなければなりません。」と加えておられる。信仰的な教育が不可欠であることも指摘される。

クリスチャンがマイノリティであるアジアの国々ではこれをどういうふう理解していくのかは難しい。愛の業を今日、改宗の強制と呼ばれる行為の手段として用いてはなりません。愛は無償で与えるものです。愛の実践を他の目的の手段としてはなりません。……しかし、だからといって愛の業を行うときに神やキリストをいわば脇に置かなければならないということではありません。その活動、言葉、沈黙、模範を通して、信頼できる形でキリストの証となることが必要です。」と言っている。これが日本などで働くときにとても大切なポイントとなる。

この4年半、それぞれの場所で多くの方が働いてくださったおかげで、カリタスという名前がいろいろなところで知られるようになったことはとてもありがたく、嬉しいことである。現場でボランティアが「カリタスさん (Mr. and Ms. Caritas)」と呼ばれているということは海外の会議に行ったときに必ず話しているが、みんな「すごい！」と反応している。言葉の意味に多くの方が興味を持ってくださり、キリスト教の神の愛であるということを知っていただけたらいいと思っている。

第二部 ①活動報告

菊地司教様のお話後、各ベース等からの活動報告が行われた。ボランティアの減少、仮設住宅から復興住宅への移行に伴う問題などが報告された。



《ボランティア参加者について》

- ・各ベースともに、ボランティア数の減少が目立つ。
- ・活動に参加して下さる方は、リピーターが多い。
- ・ボランティアの高齢化もあり、今まで通りの活動を続けることが可能か考えなければならない時期にきている。(もみの木)
- ・ボランティアと被災地スタッフの持っている意識にズレがある。もともとは被災地のことを第一に考えていたものの、「これをやってあげたいから人を集めてほしい」というような、ボランティアの自己満足になっているのではないかと感じることもある。原点である「よりそい」にスタッフが立ち返って、活動について考えていく必要がある。(大槌ベース)

《活動について》

◎復興公営住宅への転居に関して

- ・復興公営住宅への転居が進み、これまで仮設で培ってきた人間関係や支援がなくなってしまうことに不安を感じている方が多い。
- ・復興公営住宅へも支援に来てほしいと言われるが、立ち入りが厳しく、難しい場所もある。
- ・コミュニティ支援として、復興公営住宅への支援を行っているが、スタッフの技量が問われる。
- ・サロンの在り方を考え、住民からの発意を大切にしていきたい。
- ・仮設住宅の住民、復興公営住宅へ移られた方のコミュニティ支援として、お祭りや紅葉狩りを企画・実施している。(カリタス釜石、米川ベース)

◎その他

- ・社協から仮設から仮設への引っ越し手伝いを依頼された。依頼者は障がい者や独居の方で、引っ越し後も関わりを続けていけることが分かり、後々の支援につながっていくことを考え、行動しなければならないと感じた。(原町ベース)
- ・傾聴を続けるということが、教区の方針。9月5日に檜葉町の避難指示が解除されたが、今後の見通しが立っていないようで、役場としても暗中模索の状態。自分たちも檜葉町への支援で何が求められているのか考えていきたい。(もみの木)
- ・亘理町でのカフェ活動について、仮設が順次閉められることが決まっているため、来年3月頃をめどに終了予定。活動が収束していく中、継続して関わりたい学校については、内容をCTVCが考え、現地には本人たちだけで行ってもらう形を今後取っていきたいと考えている。少しずつ自分たちが主体的に活動していけるようなサポートにしたい。(CTVC)
- ・2か所の仮設住宅において、月1回、10時から15時までお茶会を行っていたが、長時間居てもなかなか住民と関わる事ができず、負担になっていた。そのため、10月から月2回、午前と午後に分けて2か所の仮設住宅に行くというやり方で、住民の方との関わりを深めたいと思っている。(石巻ベース)
- ・避難所で障がい者が周りの方々とうまく関わる事ができなかったということから、震災後、2つの障がい者の法人ができ、現在、両方の団体と関わっている。(米川ベース)

《視察》*全ベースではないが、視察案内を行っているベースがある。

- ・特別イベントとして地元の方による被災地案内を行っている。早めに視察希望を出してもらえば、帰還困難区域の近くを通行することもある。(ベース)
- ・ボランティアに来た方へ、被災地を実際に見て、多くの人に広めてほしいという思いから、力を入れている。近隣の街まで足をのばして視察案内している。(大船渡ベース)

※陸前高田市にあったベルトコンベアーは9月15日で役目を終え、10月から解体が始まる。また、気仙川にかかっている「希望の架け橋」は、3月までということで、今の状態を見たい方は早めにお越しください。(大船渡ベース)

《経験をどのように活かしていくか》

- ・今後、どこでどんな災害が起きるか分からない。そこで、各ベースで被災地支援に取り組んでいるが、そのいろいろな経験を今後の災害に対応出来るような学びが必要になってくるのではないかと。(CTVC)

第二部 ②グループワーク

各ベースの報告後、事前に議題があがらなかったため、司会のCTVCカリタス原町ベース Sr.畠中より、今後のベースのあり方について、「本音」で話し合う機会にしたいと提案がなされた。そこで、ベース長みのグループと、その他のメンバーはベースが重ならないよう4つのグループに分かれ、今後のベースのあり方や活動などについて、話し合いが行われた。話し合い後、各グループから発表があり、以下の内容があがった。



《ボランティアの活動について》

- ・今やっている活動について、参加者が固定化していたり、活動がマンネリ化しているという問題を抱えている。
- ・現在の活動を継続していくのかどうか、いつまで続けていくのか決断が迫られる。
- ・今のまま活動を続けるにしても新しい活動をするにしても、課題がある。
- ・復興公営住宅へ引っ越された方へのお茶っこなどの支援が継続出来るのか。
- ・ボランティアのためのボランティアにならないようにしなければならない。
- ・ボランティアの高齢化が問題。
- ・ボランティアの必要性は今後もあるのだろうか。
- ・ボランティアが来るからスタッフが活動を探している状況がある。
- ・仮設から復興公営住宅へと変化していく中、新しい活動の形を考えていく必要がある。
- ・どんな支援をしていけばよいか先が見えない。
- ・ニーズの見極めが重要になってくる。
- ・ベースの未来も含め、何を取捨選択するのか考えなくてはならない。

《スタッフについて》

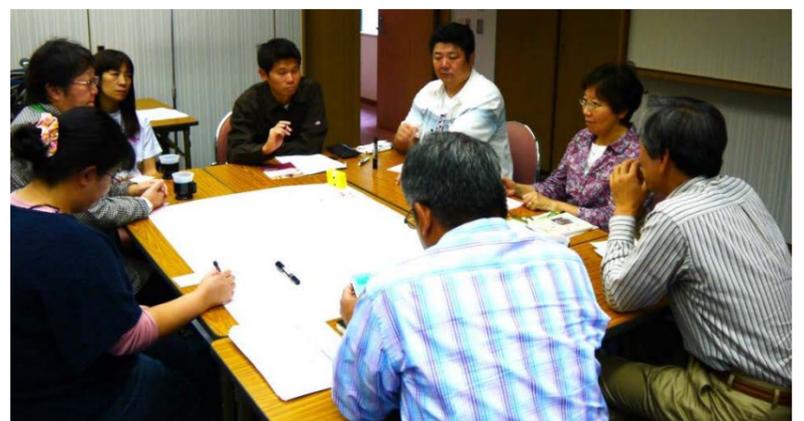
- ・ボランティアの減少はすでに始まっており、避けられないため、スタッフの人材の確保、スキルアップ、他団体との協力が考えられる。
- ・自分たちのやり方が当たり前と感じていることが多い。ベース間のスタッフの交流をもっと多く持ちたい。
- ・スタッフの入れ替えが激しいため引き継ぎをしっかりと行う必要がある。
- ・現地スタッフ採用の必要性、スタッフの専門性が求められるために教育が必要。

《広報活動》

- ・広報活動は今後も継続していくべきである。
- ・できるだけ地元の人に働きかけて参加をしてもらいたい。参加して下さる時にもどのように対応していくかという問題が出てくる。

《全ベース会議について》

- ・全ベース会議の在り方について。ベース長だけの集まりの必要性を感じる。今後は、ペーパーの読み合わせに留まらずに本来の意味での会議を行いたい。(ベース長グループ)



～大和町災害ボランティアセンターでの活動から再確認したこと～
ボランティアをする姿勢

カリタス米川ベース 松本 昂

2015年9月9日から11日にかけて、台風18号にともなう大雨の影響で、北関東、東北地方などの広範囲において、大きな人的・物的被害が発生しました。私たち米川ベースが拠点を置く宮城県登米市のすぐお隣、大崎市などでも大きな被害が出ました。

いつもは南三陸町でボランティア活動をさせていただいていますが、優先順位を考え、今回の大雨による被害があった地域へボランティア活動へ行くことを決めました。

まず、どこに災害ボランティアセンターが開設され、受け付けているのかを確認しました。すると、お隣の大崎市と仙台市の北に位置する大和(たいわ)町の2か所の社協が、ボランティアの受け入れをしているということがわかり、すぐに活動可能な大和町に、まずは申し込みをしました。



大和町災害ボランティアセンター前に集まるボランティアたち

《復興支援カレンダーのご案内》

毎年恒例となりました「東日本大震災復興支援カレンダー 2016年3月～2017年3月」を、今回も作成することになりました。

例年同様に、各ベースなどから写真を提供いただき、それぞれの活動の様子が感じられるカレンダーになっております。

また、今回は、クリスマス時期にも間に合うよう、いつもより早いカレンダー完成を予定しております。ちょっとしたプレゼントに適したカレンダーとなっておりますので、多くの方とこのカレンダーを通じて、被災地へ寄り添っていただければと思います。

皆さまからの多くのお申込をお待ちしております。
ぜひ今後の継続的な活動のためにご協力をお願いいたします。

【カレンダーお申込・お問合せ先】

◆仙台教区サポートセンター

お申込

メールアドレス sendaidsc@gmail.com

FAX 番号 022-797-6648

お問合せ

電話番号 022-797-6643

ボランティア当日、ボランティア人数は100名を超えていました。私自身、災害直後にボランティアをするのは初めてでした。受付場所では被害状況が分からず、緊張感はありませんでした。しかし、受付場所から現場近くの公民館に移動中、まだ収穫されていなかった田んぼの稲が倒れている様子を見て、次第に緊張感が高まりました。

公民館に到着後、地元の社協の方から、オリエンテーションを受けました。「被害に遭われた方のところでボランティアをさせていただくという精神を大切にしてください」ということでした。

現場に到着して、緊張感が一気に最高潮に達しました。道路が決壊している場所もあれば、土に覆われた場所もありました。

私たちは、ある一軒の家でお世話になりました。そこには、言葉ではうまく言い表せない現状が待っていました。床上浸水しており、家の中には雨水を被った痕跡が多々ありました。家の裏手に川があり、そこから水が溢れ、家の中に入ってきたとのことで、その状況が残っていました。活動は、家の中の清掃班と、玄関と庭先の泥出し班の2つのグループに分かれて行いました。



私は泥出し班となり、10cmから20cmほど泥が被っている場所から、一か所に泥を掻きだし、土嚢袋に入れる作業でした。清掃班は、家具を移動し、水に浸かった床を拭く作業でした。

休み時間に、依頼者の方とお話をする機会がありました。泥だらけになり、エンジンが止まってしまった車を見せてもらい、当時のすさまじさを語ってくれました。また、疲れていらっしゃるのにも関わらず、飲み物やおやつを用意していただくなど、色々とお気遣いをいただきました。

今回、大和町の災害ボランティアに行き、再確認しなくてはならないことがありました。それは、ボランティアをする姿勢です。普段、ほぼ毎日ボランティア活動をする中で、ボランティアをすることが当たり前になっていました。現に、ボランティアがお世話をしてあげていると、発言する人も見えました。しかし私は、ボランティアは主役になってはいけないと日々感じています。謙虚な気持ちで、現地の方と向き合う、そして寄り添う姿勢が大切だと、この大和町で再確認することができました。



掻き出された泥が入った土嚢袋

ボランティアを「させていただく」という気持ちを、米川ベースに来てくださるボランティアさんにもお伝えし、今後も一緒にボランティア活動をしていきたいと思っております。そして、今回の関東・東北豪雨により被災した地域において、一刻も早く復旧が進むことを祈ります。

ボランティアを「させていただく」という気持ちを、米川ベースに来てくださるボランティアさんにもお伝えし、今後も一緒にボランティア活動をしていきたいと思っております。そして、今回の関東・東北豪雨により被災した地域において、一刻も早く復旧が進むことを祈ります。

カレンダーをご希望の方は、お申込用紙に必要事項をご記入の上、FAX またはメールで仙台教区サポートセンターまでご連絡ください。FAX やメールをお持ちでない場合は、お電話で対応させていただきますので、お気軽にお問い合わせください。

※ご注文は5部以上、1部300円以上のご寄付をお願いします。

お寄せいただいた寄付金は、東日本大震災の復興支援活動のために使われます。

◎カレンダーは、在庫がなくなり次第、終了となります。

お早めにお申込くださいますようお願いいたします。

下の2枚の写真は、前回のカレンダーに使用された写真の一部です。今回はどんな写真が使われているのか、楽しみにお待ちください。

